

2009年2月5日

満州で日本人少年の見た外国の軍隊

阿部哲夫

日本が第二次世界大戦に負けた1945年当時、私は10歳でした。

1946年8月に日本に引き揚げるまでの1年間に満州に駐留した軍隊は、ソ連軍(ロシア軍)、国府軍(蒋介石軍とも言いました)、八路軍(パーロ、毛沢東軍、共産軍とも言いました)でした。10歳の少年にそれぞれの軍隊の与えた印象は強烈で、後々の私のものの見方に大きな影響を与えているように思います。

記憶しているままにご紹介したいと思います。

ソ連軍:

日本が負けてすぐ満州に進駐してきたのはソ連軍でした。当時我々日本人の受けた彼らについての印象は、粗野で文盲な野蛮人というものでした。我々は、彼らの多くはソ連で囚人だった連中、囚人兵だと聞かされましたが、さもありませんという感じでした。彼らは我々の家に銃を持ったまま土足で押し入り、金品を強奪してゆきました。

自分たちの持っている銃をたたいて銃を出せと脅しました。もともと我が家には猟銃が2丁あったのですが、進駐してきたソ連軍当局からの命令でそれらをソ連軍に引き渡し、その証明書を受け取っていました。対応した父が証明書を見せて、我が家にはもう銃はないのだという事を繰り返しましたが、彼らは明らかに証明書に記載されているロシア語の内容が理解できず、いつまでも銃を出せ、銃を出せとシツコク迫っていました。

また彼らは腕時計など持った事がないらしく、日本人から時計を取り上げる都度、自分の腕に取り上げた腕時計を全部巻き付けて喜んでいる感じでした。彼らは腕時計がチクタクとなっている間は楽しんでいましたが、ゼンマイがほどけて音が出なくなると、壊れたと思うらしく、腕から外して捨ててしまうのでした。

いずれにせよソ連の兵隊は、何の訓練を受けた事もない最低の連中でした。正しくゴロツキ集団というべき連中でした。日本に帰ってきてから左がかった人々から、共産主義ソ連の素晴らしさなるものを聞かされる機会がありましたが、満州でソ連兵達の蛮行を見てきた小生にはとても納得できない話でした。

国府軍:

ソ連軍と交代に、蒋介石の率いる国府軍が満州に進駐してきました。ソ連軍に比べるとマシでしたが、軍律は厳しくなく、だらけた感じで、適当な言い方ではありませんが、子供心にも“やっぱりチャンコロだな、これでは日本軍に勝てる訳なかったな”という感じでした。

また最後には八路軍に負け、台湾に逃げ出さなければならなかった訳ですが、当時の両軍の軍律の差とか彼らの民衆との関係の差などからすると、人ごとながら、やむを得なかったのだと納得したのでした。

八路軍：

国府軍の新京駐留がしばらく続いた頃、新京の郊外の方からかすかに大砲の音が聞こえるようになりました。毛沢東率いる八路軍が新京に攻め込んでくるのだと聞かされました。

ある晩のこと、夜半から砲撃の音が激しくなりました。窓際に畳などを立てかけ、その陰から外を見ていた父が、我が家の近くに建っている大陸科学院(当時アジア有数に研究所と聞かされていました)に立てこもっていた国府軍が敗走を始め、郊外の方から八路軍の兵隊達が攻め込んでくる、と教えてくれました。しばらく外を見ていた父が、ある程度外の様子が分かったところで私にも外の様子をのぞかせてくれました。窓際の物陰からチラリと見えた外の様子は、戦時中に見せられたフィリピンの戦場を敗走するアメリカ軍を描いた日本人画家の絵そのものでした。国府軍の兵隊が砂煙を上げ、必死になって左の方に逃げてゆく、右の郊外の方からは八路軍が大陸科学院めがけて駆け込んでくる、という様子が目の前で繰り広げられていました。その後八路軍は、我が家の脇に機関銃を据え、北の方を死守する国府軍の残党と撃ち合っていました。その日の午後には八路軍が勝つたらしく、新京の町全体が静かになりました。

後で聞いたところでは、新京に攻め込むまでは八路軍には大砲の様な重火器はなかったのだそうです。新京を攻める頃になって旧関東軍が八路軍に合流し、これが一つのきっかけにもなって、予想外の国府軍敗退につながったとの事でした。

進駐してきた八路軍には若い兵士が多く、今の日本で言えば中学生にしか見えない様な若い兵隊がかなりいました。

八路軍はしばらく新京に駐留していましたが、彼らの軍律は厳しく、敗戦国民である日本人に対しても丁寧な対応をしていたように思います。

あるとき我が家の近くにある南湖という人造湖で魚取りをしていました。透明なセルロイドで出来た筒の中に餌と重しを入れ、それにひもをつけて湖水に飛ばし、しばらく待っていると小魚が中に入っているという取り方です。魚取りに夢中になっていて気がつくと、いつの間にか八路軍の将校とおぼしき若い青年が、手真似で自分にもやらせてくれというのです。万事ものの不足している時代、この魚取り器は小生の宝でした。しかし子供ながらに、こちらは敗者、こちらは勝者と考えたのでしょうか。それに彼の態度は大変丁寧でした。こうしたこともあって、この魚取り器を彼に貸しました。彼はこれを何回か湖面に飛ばしたり、取り込んだりして楽しんでいました。そのうち魚取り器をつなぐひもが手から滑り落ちてしまい、魚取り器は湖水の中に沈んでしまいました。大事にしていた宝物をなくした小生の驚きは大きなものでしたが、彼の狼狽ぶりはそれ以上でした。彼は必死になっ

て魚取り器の回収に努めました。近所のうちに行って竿を借りて来て、水中に沈んだ魚取り器を引っ掛け上げようともしました。色々やってみましたが結局無駄でした。

彼の必死の努力は子供の小生にも分かりました。戦勝軍の将校である彼の努力に感銘を受けた事もあったのでしょう。私はもう良いという意味を彼に伝えました。彼は何回も謝りました。二人は気持ち良く分かれしました。

そうこうして数週間経つうちに国府軍が勢力を盛り返し、新京は再び国府軍の占領するところとなりました。

このときは八路軍は全く戦わずに新京から撤退しました。ある晩八路軍は新京の街から去ったのです。驚いたことに、彼らは日本人から徴用した品物は、ほとんど全部置いていったのです。ソ連軍は日本人から色々なものを強奪してゆきました。国府軍は日本人から徴用したものは、黙って持って行ってしまいました。ところが八路軍は敗戦の日本人からでも、借りたものをキチンと返していったのです。

我々は八路軍に爽やかな好印象を持ちました。

我々が日本に引き揚げた後、国府軍と八路軍には数々の激しい攻防があったようです。最終的には八路軍が勝利し、中国全土が共産党の支配する所となりました。この毛沢東軍の中国全土席卷のニュースを聞いたとき、魚取り器を回収しようと懸命だった八路軍の青年将校の事とか、借りたものは返して静かに撤退していった八路軍の事とかを思い出していました。こうした八路軍の誠実な態度が一般の民衆に支持され、最終的な八路軍の勝利に繋がったのだらうと思ったのでした。

こうした満州での思い出がありましたから、八路軍がベースになって出来た新生中国には無意識のうちに好感を持っていたようです。文化大革命がおこった時も、長い歴史の中で腐った人口十億の大国を掃除し、再生させるためには、毛沢東の様なカリスマ性ある強烈な指導者を持ってしても、これだけの大掃除を繰り返し継続しなければならないのだらう。辛抱強く文化大革命を繰り返し、一連の文化革命が完成した暁には素晴らしい社会が実現するのだらう、と好意的な期待を持ってみていたのでした。

(実際には文化大革命は、タフな中国人の許容限界を超えていたものだったらしく、大規模かつ深刻な修正活動が始められました。最近日常伝えられる情報によると、今や中国は昔のように上から下まで腐敗してしまい、健全化の可能性は絶望的だとまで言われるようになっているようです。新京に進出した当時の、清新な、周囲を改革に巻き込んでゆく八路軍はどこに行ってしまったのだらうか、と不思議に思っています。)

日本軍:

比較の為に10歳の少年の目に映った日本軍について書いておきたいと思います。

我が家の近くにあった南湖の畔には、演習を終えた日本の兵隊さん達が時々集合して歌を歌っ

たり、上官が訓示を垂れたりしていました。時に兵隊を我々が見ている前で激しくビンタしたりしていました。子供心に我々も大きくなったら、こういう事をやるようになるのだらうなと思っていました。

戦後日本の元軍人が捕虜虐待などの罪で罰せられたりしましたが、日本の軍人同士で暴力を振るうのがこのように日常化していた事を考えると、敵であった捕虜に暴力を振るう事に対する日本軍内の抵抗感は低かったのではないかと思います。敵の捕虜になった時とか、敵を捕虜にした時の対処の仕方について教育されていなかったと言われる戦時中の日本の軍隊には、なおさら抵抗感は低かったのではないかと思います。

日露戦争当時の資料等を読むと、当時の将校達にはそうした事についての教育が徹底されていたらしく、捕虜の扱いなどについて神経質なぐらいに配慮していた事が伺えます。日露戦争のあたりを境に日本軍の国際的な配慮は、様変わりに後退したのでしょうか。

アメリカ軍：

1946年に日本に引き揚げ、1947年に東京に出てきた当時、アメリカ軍を主とする占領軍の態度は、満州駐留のソ連軍に比べれば、数段良好だったように思います。

ただ戦場からそのまま進駐してきたソ連軍と、進駐して二年も経っていたアメリカ軍とでは同じレベルで比較することには問題もあるでしょう。

注：

1. 戦後満州という国は消滅し、この地域を中国東北部というのが通例になっているが、ここで育った人間が戦後ここで経験した事を報告するには、満州というのが自然なので、ここでは満州という呼び名を使った。
2. 現在のイラク人にとってみれば、イラクに駐在しているアメリカ兵などは、日本の敗戦後満州に駐留してきたソ連兵と同じように、粗野で野蛮な連中と見えているのではないと思う。

以上